

論文

貧困計測の枠組みとしての潜在能力アプローチ

——貧困計測手順をめぐる論点の考察——

岡 敬之助*

1. 問題意識と目的

貧困は多様であいまいな概念である。その内容を具体的に記述することは容易でない。貧困の認識を困難にしている一つの事情は、貧困を除去する、あるいはすくなくとも緩和するための政策をいまずぐ講じなければならないという、その緊急性にある。たとえ暫定的であっても、われわれは貧困を特定し、それを計測する方法を決定しなければならない。そして暫定的であれ、そこで決定にもとづいて政策を立案し、実施しなければならない。このような事情のもとでは、〈何をもって貧困と呼ぶか〉という貧困の認識そのものについては、議論が不十分であることはまぬがれ得ない。貧困の認識を困難にしているもう一つの事情は、こうした暫定的な定義さえ当事者である貧しいとされる人びとの声を反映したものになっていない、ということにある。すくなくともディーパ・ナラヤンが企画し、収集した *Voice of the Poor* (2000) が登場するまでは、当事者である貧しいとされる人びとがみずから語る機会をもつことはほとんどなかった。

実践の現状をみると、貨幣を基底とする貧困線アプローチが、今日もなお貧困緩和政策の効果を評価する主要な手法であり続けている。このアプローチにしたがった貧困指標は、集団の状況のある側面をあらわすものであり得ても、誰がどのような貧困状態にあるか、を問うものになってない。

本稿では、貧困の認識と計測という、異なるが密接に関係する2つの概念が直面していると思われる主要な問題点を整理して、貧困を除去し、または緩和することに資する貧困の認識と計測の考え方を分析する。そのうえで、〈潜在能力アプローチ〉がこのことに資する貧困計測の一つの枠組みを提供し得ることをのべる。

2. 貧困の認識と計測

貧困がはじめて定量的に計測されたのは、19世紀末から20世紀初頭に実施されたイギリス都市労働者世帯の家計調査であった。チャールス・ローンフリー (1901)、ベンジャミン・ブース (1902/03) は、人の福祉 (well-being) を指標に、〈貧困線〉とよばれる限界水準以上の福祉を享受するのに十分な消費または所得を確保できないときに貧困と見做す、という考え方を提示した。彼らは貧困が多面的な概念であることを十分認識していたが、便宜上、福祉を消費または所得によって計量できるとした。こうした貨幣を基底とする貧困線アプローチにしたがった貧困計測は、その後、貧困の同定と削減行動の成果をはかる実践可能な方法として、多くの国々でひろく適用され続けてきている。

アマルティア・セン (1981) は、その著書 *Poverty and Famines* のなかで次のように述べている。

貧困に関することはたいてい一目瞭然である。ひどく貧しいことを見分け、そうなった経緯を理解するのに、

キーワード：貧困計測、貧困概念、貧困区分、貧困集計、潜在能力アプローチ

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2003年度入学 公共領域

綿密な基準や巧妙につくられた指標、徹底的な分析などは必要ない。(中略) 貧困と悲惨に関しては分かりきったことが実に多いのだ。しかし、貧困に関わることのすべてがそれほど単純なわけではない。まず、極貧状態をのぞけば、誰が貧しいかを決め、どのように貧しいかを診断することさえ容易ではないだろう。(中略) 最後に、もっとも重要なことは、貧困の原因は簡単に答えられない問題である、ということである。(p.vii)。

センの含意の第一は、一目瞭然な貧困に曝されている人びとは、計測や分析をするまでもなく、第一義的に、公共的行動によって緊急に救済されなければならない、ということである。これに対し含意の第二は、一目瞭然ではないが、貧困に苦しめられている人びとが現実存在するのに、これら貧しいとされる人びとの貧しい状態を認知すること、およびその原因を追究することがいかに困難であるか、を指摘していることである。それでは、どんな状態を〈貧しい状態〉と認知するか。これに関して、セン(1992, pp.108-109)は、従来の貧困のとらえ方を批判して、次のように述べている。第一に、「なにをもって深刻な困窮とするかは(中略)社会によってまちまちであるから、当該社会の基準に照らして真に困窮している人びとが誰であるか、を判断するという作業を記述的におこなう」ことが必要である。「こうした社会に応じた多様性に対応した評価こそ客観的評価」であり得る。第二に、しかしこれは「何をもって深刻な困窮とするか、についての(中略)合意を得る可能性まで排除するものではない。基礎的機能とそれに対応する潜在能力に着目するほうが(中略)問題となっている困窮の重大さについて合意が得られやすいのだ。」と述べている。第三に、貧困は、潜在能力の欠如、とくに基礎的潜在能力の欠如という観点から直接的にとらえることができる。ここで述べている〈潜在能力〉とは、人が選択可能なさまざまな〈機能〉[いろいろな存在することと為すこと (being and doing) を実際に可能にする能力]の組み合わせベクトルの集合である。潜在能力は、みずから価値あると思おう理由のある生き方を追求するのに欠くことのできないものである (Sen, 1985a, pp.6-11)。セン(1992, p.9)は「貧困は基礎的潜在能力の欠如した状態である」(貧困の定義)と述べる。こうした個人と社会の多様性に関わった貧困の概念は、分析の枠組みとしての客観的な意味をもつといえる。

貧困の根本的除去に資するには、貧困の認識と計測の問題が、それぞれの人の潜在能力の保有状態に焦点をあてるという文脈のなかで検討されなければならない。

3. 貧困計測の枠組みとその特性

計測するとは、計測対象と得たい情報を特定したうえで、その情報を表現する諸要素から構成された一つのシステムとして計測対象をとらえることである。これに外部から(観察、質問をふくむ)なんらかの作用を入力し、出力として得られる応答を適切な計測手段によって把握し、分析する。計測するとは、こうした手順によって計測対象の特定の側面に関する認識を情報として入手する、一連のプロセスである¹。

貧困を除去または緩和する視点から貧困を計測するにあたり、下記の諸点に留意することが求められる。第一に、貧困とよばれる事象は具体的な空間的・時間的文脈に即していろいろな形をしてあらわれるが、そのいずれも同じ〈貧困〉という語でよばれてきた、ということである。第二に、人間の多様性を前提としながらも、貧困という多元な個人の福祉のある特定の状態を、貧困ではない状態と区分して表現することが求められる、ということである。第三に、貧困は、価値判断ではなく、文脈に即して具体的にあらわれた事実として記述されるべきである、ということである。第四に、計測するとは目的や手段に即して対象の状態の一部を〈切り取る〉ことであって、評価者の恣意的判断が入り込むことをまぬがれ得ない、ということである。第五に、人の生き方をあらゆる構成要素は連続分布量として存している、ということである。計測する立場からいえば、貧困でない状態と区分して、貧困である状態をどのようにして把握するか、という論点が存する。計測される立場からいえば、貧困でない人びとと区分されて、貧困者であるという烙印を押された者がもつかもつかない、被差別と恥辱の意識や烙印忌避の意識をどのように配慮してもらえるか、という論点が存する。したがって、設計した計測方法が貧困とされる人びとの声を反映したものになっているか、という視点をもつことが重要である。

なお、貧困とされる人びとを貧困ではない人びとと区分するやり方として貧困線アプローチを適用することが不自然であるとして、1990年代にファジー集合論を適用した区分のやり方が提案された。以下において貧困計測の方

法と論点を述べるにあたり、これらを包含する、より一般的に形式化した枠組みとして説明する (cf. Brabdorini, 2009)。

4. 貧困計測における計測空間

計測対象の構造を把握するため、その特性と状態を表現する諸要素〔所得、栄養状態、尊厳など〕で構成された計測空間を想定する。形式的に言えば、福祉が有限個の要素の組み合わせベクトルの集合として表現できる、と仮定する。〈福祉〉(well-being) という語は多義な概念をもっているが、本稿では、これは、これら諸要素の一つの組み合わせによってあらわされる一つの生き方の状態をあらわす概念である、とする。各要素は、それぞれ少なくとも2つの状態を比較して順序づけできる、とする。人の達成可能な福祉は、それぞれの要素を一つの次元とする多次元空間における、一つの閉曲面上およびその内部に存する諸点があらわす状態のいずれかである。これら諸点は有界な点集合を形成している。当該個人はそのすべてを実際に保有しており、みずからの目的に照らして、ある一つの点を選択することによってある特定の福祉を達成する、と考える。この考え方はセンの潜在能力アプローチに沿ったものである。各次元が機能をあらわし、達成可能な部分空間の点集合が潜在能力〔機能ベクトルの集合〕をあらわす。

各要素に関して、人間らしく生きることができない最高の限界値〔幅が存する場合にはその下限値〕が存在すると仮定する。この場合、すべての要素に関してこの最高の限界値で構成される閉曲面上およびその内部に存する諸点は、まったく人間らしく生きることができない貧困状態をあらわし、完全な貧困集合をなす。また、各要素に関して、人間らしく生きることができ最低の限界値〔幅が存する場合にはその上限値〕が存在すると仮定する。この場合、すべての要素に関してこの最低の限界値で構成される閉曲面上およびその外部に存する諸点は、人間らしく生きることが最低限可能な状態をあらわし、完全な非貧困集合をなす。実現可能な空間の全集合から非貧困集合と完全貧困集合を除いた部分集合は、いろいろの意味で貧困と非貧困を区分できないあいまいな空間である。

5. 貧困計測の手順

評価者は、はじめに計測目的を設定し、計測対象範囲および得たい情報、すなわち計測したい諸要素とその計測手段を選定する。必要に応じて手段を設計する。次に、選定した計測手段を用いて選定した諸要素を計測する。形式的に言えば、 n 人からなる集団 N に属する個人 i ($i = 1, 2, \dots, n$) に関する m 個の要素 j ($j = 1, 2, \dots, m$) の計測値を d_{ij} とすると、当該集団 N における計測値集合 $\{d_{ij}\}$ ($i = 1, 2, \dots, n; j = 1, 2, \dots, m$) を得る。

次に、この計測値集合を用いて、貧困と非貧困を区分する。この区分はファジー集合論²の考え方をを用いて形式的に示すことができる。すなわち、所与の集合 X において、要素 x ($\in X$) が集合 A ($\subseteq X$) に属しているかどうかを表現する写像関係を $\mu_A(x)$ であらわすと、 X のファジーな部分集合 A は、

$$\forall x \in X, \exists A \subseteq X, \mu_A(x) : X \rightarrow [0, 1]$$

なる順序対集合 $A \equiv \{x, \mu_A(x)\}$ となる。 $\mu_A(x)$ は X から閉区間 $[0, 1]$ への写像であって、 x が部分集合 A に属しているあいまいさの程度をあらわし、〈メンバー性関数〉とよばれる (Cerriori and Zani, 1990, pp.272-273)。この考え方を個人 i の貧困と非貧困の区分に適用する (Chiappero Martinetti, 1994, pp.372-376)。すなわち、ある要素 j の計測値 d_{ij} に関して確実に非貧困であると判断される下限値 z_j^U 、確実に貧困であると判断される上限値 z_j^L が存在すると仮定すると、貧困と非貧困の区分は、メンバー性関数 μ_j を用いて、次のようにあらわすことができる。

$$\begin{aligned} z_j^U \leq d_{ij} &\rightarrow i \text{ は非貧困に属する} & \mu_j(i) &= 0 \\ d_{ij} \leq z_j^L &\rightarrow i \text{ は貧困に属する} & \mu_j(i) &= 1 \\ z_j^L < d_{ij} < z_j^U &\rightarrow i \text{ はあいまいな領域に属する} & 0 < \mu_j(i) &< 1 \end{aligned}$$

$z_j^U \neq z_j^L$ の場合、 z_j^U と z_j^L の間は貧困と非貧困を厳密に区分できないあいまいな領域である。とくに $z_j^U = z_j^L$ の場合、この値は不連続な閾値である貧困線に相当する。

次に、この計測値を用いて貧困を表示する。表示方法には、非集計のまま連記する方法と多変数写像の考え方を

用いて集計する方法がある。後者の考え方を形式的に示すと、 $Y, X = \{X_i \mid (i = 1, 2, \dots, k)\}$ を集合とし、 $\{X_i\}$ の各元 $\{x_i\}$ に Y の元 $\{y\}$ を対応させるルール f が定められているとき、集合 Y は、

$$f : X_1 \times X_2 \times \dots \times X_k \rightarrow Y$$

なる多変数写像 f によって規定することができる。あるいは、 $\{X_i \mid (i = 1, 2, \dots, k)\}$ と Y は関数関係にあるといい、

$$y = f(x_1, x_2, \dots, x_k)$$

なる k 個の独立変数の関数 f によって規定することができる。この手順を各要素に関する計測値の集計に適用すると、個人の各要素の計測値から、関数の形で、個人の貧困指標を求めることができる。同様に、要素別の統計値から、関数の形で、集団の貧困指標を求めることができる。関数の決め方には大別して2つの方法がある。一つは、関数を事前に設定し、収集された計測値をこの関数にあてはめて集計する外生的方法である。これには、公理的アプローチに基づいて導出された関数にあてはめる方法と、専門家により提示された関数〔ほとんどが線形関数〕をあてはめる方法がある。もう一つは、収集された計測値を分析する過程でつくりだされる内生的方法である。これには、多変量解析が適用される〔たとえば、主成分分析、因子分析〕。とくに線形関数のあてはめについていえば、関数が各要素の計測値 $\{x_i \mid (i = 1, 2, \dots, k)\}$ の一次結合であらわすことができる〔理想的には各要素が相互に独立している〕と仮定して、多変数関数を用いて次式のように集計する。

$$y = w_1x_1 + w_2x_2 + \dots + w_jx_j + \dots + w_kx_k$$

ここで、 $\{w_j\}$ 、 $(w_1 + w_2 + \dots + w_j + \dots + w_k = 1)$ は、集計に際して $\{y\}$ に対する $\{x_j\}$ に割り当てられたウエイトである。計測値は通常規格化された値を用いる。これらの考え方をを用いて、上述の計測値から貧困を表示する。まず、個人 i の貧困表示には2つの方法がある。

① 非集計のまま、要素集合として表現する： $\{\mu_j(i) \mid (j = 1, 2, \dots, m)\}$ 。

② 集計する： $S_i = g_i(d_{i1}, d_{i2}, \dots, d_{im})$ 。 g_i は $\{d_{i1}, d_{i2}, \dots, d_{im}\}$ を独立変数とする写像関数である。関数はそれぞれの個人に共通すると考えることもできる。集計値 S_i は個人 i の貧困指標である。これは関数にしたがって基数量であらわすことができる。またメンバー性関数的にあらわすことも可能である。

集団 N の貧困表示には3つの方法がある。あらかじめ、各個人の計測値をもちいて、要素ごとの集計値 S_j を得ておく。 S_j は、諸個人の計測値集合 $\{d_{1j}, d_{2j}, \dots, d_{nj}\}$ を要素 j に関する確率変数と見做し、その平均値として求めることができる。

③ 非集計のまま、要素集合として表現する。 $\{S_j \mid (j = 1, 2, \dots, m)\}$ 。または、メンバー性関数 $\{\mu_j(N) \mid (j = 1, 2, \dots, m)\}$ として表現する。ただし、

$$\begin{aligned} z_j^U \leq S_j \rightarrow N \text{ は非貧困} & \quad \mu_j(N) = 0 \\ S_j \leq z_j^L \rightarrow N \text{ は貧困} & \quad \mu_j(N) = 1 \\ z_j^L < S_j < z_j^U \rightarrow N \text{ はあいまいな領域} & \quad 0 < \mu_j(N) < 1 \end{aligned}$$

④ S_j を集計する： $S = f(S_1, S_2, \dots, S_m)$ 。 f は $\{S_j \mid (j = 1, 2, \dots, m)\}$ を独立変数とする写像関数である。集計値 S は集団の貧困指標である。これを関数にしたがって基数量であらわすことができる。またメンバー性関数的にあらわすことも可能である。

⑤ 個人に関する集計値 S_i を集計する。あらかじめ S_i を基数量として得ておけば、 S は、個人の貧困指標集合 $\{S_i \mid (i = 1, 2, \dots, n)\}$ を個人 i に関する確率変数と見做し、その平均値として求めることができる。

表示方法には2つの方法がある。ひとつは複数の要素を成分とするベクトル自体を表示対象とする方法である：①、③〔たとえば、スウェーデン法 (Erikson, 1993)〕。もうひとつは各要素のウエイトづけされたものの一次結合または関数的組み合わせによって、ひとつの貧困指標とする方法である：②、④、⑤〔たとえば、貧困者比率、人間開発指数〕。なお、集計に際して適用する関数の形は各段階で一般に異なる。たとえすべての段階で線形関数をあてはめたとしても、各計測値に割り当てられるウエイトは個人 i と要素 j によって一般に異なる。すなわち、集計値は、個人の計測値集合 $\{d_{ij}\}$ から貧困指標 S に集計する2つのルート〔すなわち、 $\{d_{ij}\} \rightarrow \{S_j\} \rightarrow S$ および $\{d_{ij}\} \rightarrow \{S_i\} \rightarrow S$ 〕によって異なる (Dutta, Pattanaik and Xu (2003))。

6. 貧困計測をめぐる論点 (1) : 計測要素

多次元アプローチ自体は新しいものではない。それは、国際機関のレポートにも強い影響を与えている。しかしなお貨幣を基底とする貧困線アプローチが貧困計測の実践上の主流を占めている。いずれのアプローチにも共通する論点は、計測プロセスのいろいろな段階で入り込むことが避けられない評価者の恣意的判断の問題を、どのように扱うのがより説得的であるかということである³。恣意的判断の問題は、ここで分析する3つの主要な論点 — 計測要素、貧困と非貧困の区分、集計 — においていろいろな形であらわれている。

計測要素をめぐる論点では、計測に際し、計測目的に照らして、福祉を構成するどのような要素を選定するのがより適切か、という問題がある。一つは、実際に計測する具体的な要素には、福祉を構成するどのような要素が望ましいか、である。もう一つは、計測する望ましい対象は当事者の達成された福祉か潜在能力か、である。

前者の問題は、多次元アプローチによる計測例も少なくないが、実際の計測の容易さから、貨幣を基底とする所得または消費といった要素の計測例が圧倒的に多いという現実に関わる。貧困計測を設計する際には、計測目的を明確にし、目的に照らして適切な要素を具体的に選定することになる。ここでの論点は、要素の選定が評価者の恣意的判断にゆだねられていることにある。多くの研究者は、普遍的または欠くことのできないとする基礎的要素または基礎的機能のリストを提示している⁴。しかし、セン(2004)の考え方によれば、潜在能力アプローチが述べていることは、在ることと為すことを実現するために、当事者みずからが必要または望ましいと思う機能を〈選択できる〉ことに重点がある、とする。選択可能な機能の具体的な内容に重点があるのではない。貧困を根本的に除去することに資する情報を得るためにどのような要素を選定し、計測し、評価するのが有用か、は、計測目的に即してあらためて吟味されなければならない。この認識に立てば、当事者が有する基礎的潜在能力のなかに、みずからが価値あると思ってしまう理由のある生き方の追求を最低限可能にする有用な選択肢がふくまれているか、どれだけふくまれているか、をどのようにして評価するか、が論点である、と述べることができる。このことを明らかにするには、観察にくわえて、評価対象の当事者に問い合わせるしかない。そして、理想的には、当該社会は、それぞれの人が価値あると思ってしまう理由のある生き方の追求を可能にする、それらの〔少なくとも基礎的〕機能を用意しておくことが求められる。

後者の問題は、実際の計測の容易さから、達成された福祉が計測されている現実に関わる。達成された福祉の計測結果は、それ自体、情報の乏しい単なる事実の記述である。それだけでは、その人が貧困かどうか、どのように貧困であるか、を評価することができない。これに対し、〈潜在能力を評価する〉とは、その人が潜在能力としてどのような機能ベクトルを保有しているか、を見極めることである。保有している機能ベクトルが、みずからが価値あると思ってしまう理由のある生き方を追求するのに有用であるか、実際に供し得るものか、を評価できるからである。一旦こうした理解に立てば、達成された福祉は、単なる事実の記述ではなく、ある環境条件のもとで特定の福祉が達成されてきたプロセスを反映している、といえる。すなわち、当事者は、実現可能な機能ベクトルの集合とその選択の自由を有しており、特定の文脈に即してそこから特定の機能ベクトルを選択した、とのべることができる。そして、もし達成された福祉が困窮に苦しめられている状態であれば、それは少なくとも基礎的潜在能力の欠如した状態である、といえる。困窮を免れ得る機能ベクトルを実際に保有していないと見做さざるを得ないからである。こうした理解にたてば、人の福祉は、達成された福祉と潜在能力の両方を評価するのが望ましい、といえる (Sen, 1985b, p.175; *ibid.* 1997b, pp.745-746)。

7. 貧困計測をめぐる論点 (2) : 貧困と非貧困の区分

貧困と非貧困の区分をめぐる論点では、貧困状態を貧困ではない状態からどのように区分して把握するのが適切か、という問題がある。一つは、区分の閾値としての貧困線が合理的な根拠を有するか⁵、である。もう一つは、区分の閾値に代わり得るとされるファジー集合アプローチが有用か、である。

前者の問題は、19世紀後半 - 20世紀初頭に貧困線が導入されて以降、執拗に用いられつづけている現実に関わる。貧困線は集団を構成する人びとを貧困と非貧困という2つの部分集合に分割する基準として導入された。貧困線は、

人びとが貧困であるとは思わない生活の最低水準の内容を基準として示すこと、貧困状態に関する個人間、集団間、異時点間の比較を通じて人びとを貧困集合から離脱させるためにながら必要かを示唆することにおいて、一定の役割を果たしてきた。行政にとっては扶助対象者としての貧困者を選定する基準であり得る。個人にとっては生存を保障する権利主張の根拠となり得る。しかしこのアプローチの最大の弱点は、公式の貧困線の設定根拠があいまいであることにある⁶。根拠として生物学的根拠、ベーシック・ニーズ、消費支出コスト、調査対象者自身の主観的判断〔たとえばライデン型貧困線⁷〕などがあげられている。しかしこれら根拠とされることからは、いずれも生活上最低限必要とされる理由を必ずしも明確に述べていない。くわえて、所得などの要素の多くは連続量であるから、これを貧困線という閾値で区分することは、その直上と直下で所得にあまり差がないのに、これらの人びとを貧困と非貧困に峻別することになる。またその設定位置が少し動くだけで貧困と非貧困の区分に敏感に影響をあたえることになり、基準の安定性に欠ける (Lipton and Ravallion, 1995, pp.2582- 2583)。結局、貧困線は、評価者が恣意的に設定せざるを得ない。

後者の問題は、貧困線による不自然な区分を回避するために導入されたファジー集合アプローチの有用性に関わる⁸。これは、不自然な区分を緩和する方法として、貧困という漠然とした事象を一見取り扱いやすくしているように見える。しかしこのアプローチは、貧困とあいまい領域、あいまい領域と非貧困を区分する上下の貧困線の設定と同義である。これは、貧困線がもつ本質の問題を回避していない (Bailestrino, 1994, p.397)。同じことであるが、ファジー集合アプローチで導入されるメンバー関数において、〈部分的に貧困層に属する〉とは具体的にどのような状態を含意するか、はっきりしない。メンバー関数の関数形には無数の可能性があって、そのいずれを採択するかも、評価者の恣意的判断を免れ得ない (Chiappero Martinetti, 2000, Appendix A)。

8. 貧困計測をめぐる論点 (3) : 集計

多元な側面を有する各個人の貧困状態を集計してひとつの貧困指標で表示することは、それなりにいくつかの利点がある。第一に、当該集団の貧困状況を大局的に把握できる。第二に、連続値として表現できるので、個人間または集団間の完備な順序づけや比較が可能である。第三に、異時点間でこの指標を比較することにより、講じた政策が指標の含意する貧困の緩和に有効であったか、を評価できる。研究の現状をみると、第一に、依然として貨幣を基底とする一次元貧困指標の精緻化の議論が続いている。貧困者比率、貧困ギャップ、センの貧困指標、FGT 指数などの指標がなお広く実用されている。これらの指標は、貧困線を前提にしているものの、貧困計測や反貧困戦略の設計を容易にしておき、使いやすい。反面、貧困が多元の側面を有する概念であることを考慮すると、人びとが直面している貧困状態を必ずしも適切に反映したものになっていない。第二に、実践に適用し得る多次元貧困指標は、UNDP で創出された人間開発指数 (HDI) とその一連の指標族がある程度である。

しかしながら、多次元な貧困の計測値の集計をめぐる論点では、各個人の計測値を用いて当該集団の貧困指標に集計するのに、どのような手順をもちいるのがより適切か、という問題がある。一つは、どのような集計モデルを適用するのがより適切か、である。もう一つは、とくに多用されている線形モデルにおいて、それぞれの要素にどのようにウェイトを割り当てるのがより適切か、である。

前者の問題は、実際の集計の容易さからほとんどの評価者が線形モデルを適用している現実に関わる。5 節で集計に用い得るいくつかの関数モデルを例示したが、そのいずれを用いるのが望ましいか、は評価者の恣意的判断にゆだねられている。ほとんどの評価者が適用している線形モデルは、計測値を規格化した値の一次結合である線形関数である。しかし、彼らは、これら諸要素を一次結合できるとする理論的根拠を述べていない。たとえば、一次結合に供するそれぞれの要素が相互に一次独立である、という保証がない。得られた結果の評価と解釈もこのモデルを適用した評価者の恣意的判断にゆだねられている。

後者の問題は、線形モデルを前提に、ウェイトづけが多次元アプローチにおけるひとつの検討課題として見做されている現状に関わる。ある特定の要素が貧困と強く相関する福祉の要素であれば、ウェイトづけの問題はそれほど重要でない。しかし、各要素が集計値としての貧困指標にたいしてそれぞれに影響をおよぼしているとする、各要素をどのようにウェイトづけするかは、一つの論点である。これまで下記する方法が検討されている。①等し

いうウェイトづけをする〔たとえば、現行のHDI〕。等ウェイトづけでは、各要素の間で福祉と貧困に対する影響がいろいろ異なる事情を考慮せず、結果的に要素間で重なり合っている部分を重複して算定することになる。これは、その部分を過大にウェイトづけしている懸念がある (Brandolini and D'Alessio, 2001, p.22)。②要素ごとの貧困者比率でウェイトづけする。この方法は、貧困者比率の低い構成要素こそ強く貧困指標に反映させるべき、という考え方に基づいている (Cerioli and Zani, 1990, pp.276-277)。③市場価格をウェイトとして用いる。④主成分分析法、要因分析などを用いるなかで、内生的に導入される。⑤集計関数が満たすべき直観的公理の組み合わせを前提に論理的に導入される。

上述の議論とは別に、そもそも、貧困状態の表示にあたり、集計することが適切か、という集計是非の問題がある。上述したように、ひとつの貧困指標として表示するには、集計手順やもちいる集計モデルなどの条件を特定する必要があるが、ここに評価者の恣意的判断の入り込む余地がある。そして、いったん集計値が得られれば、上述した事情でたしかに有用である。しかし、得られた貧困指標があらわす意味の具体的理解について当該集団で合意が得られるか、は議論のあるところである。集計過程で当事者にかかわる多くの個別情報が失われる、という懸念がある。あるいは集団内にひそむ特定の個人の深刻な貧困や欠乏の事実が覆い隠されたまま、得られた数値だけがひとりあるきする、という懸念もある。こうした事情から、集計アプローチを避ける考え方もある (たとえば、Chiappero Martinetti, 2000, pp.211-212)。セン (1987, p.33) は、「集計に対する情熱は多くの文脈でよい意味をもつが、他のケースで無益であったり的是はずれであったりし得る。多様性に耳を傾ける場合、われわれはいつも集計者の能力範囲を必要とするとは限らない」と述べている。換言すれば、無条件に集計することが必ずしも望ましいわけではない、ということである。ひとつの示唆がスウェーデン法 (Ericson, 1993) のアプローチである。

9. 考察

貧困計測をめぐって提起されている論点は、貧困計測のいろいろの段階で入り込む評価者の恣意的判断を排除できない一方で、計測対象とされる人びとの声を反映したものになっていない、ということである。第一に、こうした評価者の恣意的判断がまずく作用すると、貧困が緩和したと述べられたとしても、当該集団で貧困者が減少したとは必ずしもいえない。また、たとえ確かに減少したとしても、なぜ減少したかその根拠を明確にできない。もし貧困の減少に失敗したとしたら、なぜ失敗したか、どのように改善すべきかについて、示唆を受け取ることもできない。なぜなら、これまでの多くの計測事例でもっばら達成された福祉だけに焦点があてられているからであり、しかも、貧困認識が評価者の恣意的判断に依拠しているからである。第二に、計測に際して評価者の恣意的判断が無条件に許容されると、評価者の計測設計自体にある種の歪みが入り込むかもしれない、という懸念がある。たとえば、同じ計測対象者集団を扱いながら、評価者が異なれば異なる計測結果が得られることになるかもしれない。こうした貧困計測の結果が記述的、客観的であるといえるか、は議論のあるところである。あるいは、たとえば、行政が貧困者への資源分配を削減し、あるいはある目的の政策を遂行することを意図した場合、その根拠づけを可能にする統計データが得られるように貧困計測の設計をすることは、必ずしも不可能ではない。こうした点を配慮しないままなされてきた貧困計測の設計とこれに基づく貧困計測の評価結果は、社会的規範に照らして公正といえるか、は、おおいに議論のあるところである。くわえて、第三に、計測対象の当事者である貧困とされる人びとが、社会関係の乏しさを訴えているにもかかわらず、評価者がこうした訴えをあまり顧慮していない、ということである。多くの評価者は貨幣を基底とする要素だけを選定し、その妥当性を当事者である貧困とされる人びとに問い合わせることもしていない。貧困とされる人びとは、物質的欠乏もさることながら、不安定・不安全的暮らし、社会的排除、経済的社会的機会や社会参加の乏しさ、権力による不当な抑圧、人間としての尊厳に否認といったことの改善を訴えているのである〔たとえば、*Voices of the Poor* (Narayan et al (2000))〕。

6-8節の分析にしたがえば、これまでの貧困計測の多くが評価手法自体に関する論点について多く論じられながら、受け入れることのできないほどの困窮に曝されている多数の人びとがわれわれの社会に存するという、現実を直視する視点からの議論があまり見られない。潜在能力アプローチの枠組みにしたがえば、貧困計測とは、当該集団のすべての人の達成された福祉の個別観察にくわえて、それぞれの人の生き方、すなわちみずからが価値あると

思いそう思う理由のある生き方、の追求が可能であるか阻害されているか、を聞き取ることによって、貧困を事実として客観的に認識することである、と述べるができる。そのうえ、潜在能力アプローチは人間と社会の多様性に関わられた枠組みになっており、計測プロセスの各段階で入り込む評価者の恣意的判断を免れる取り扱いが可能である。

10. 結語に代えて

本稿は、貧困の認識と計測の概念が相互に規定しある事情のもとで、貧困の事実認識に即した福祉の計測にかかわる論点を分析し、考察した。貧困の計測に際して、いろいろな段階で評価者の恣意的判断が入り込むことは避けられない。主な論点は、この問題をどのように扱うのが事実として記述的な貧困の認識を得ることになるか、ということであった。

もし「貧困は基礎的潜在能力の欠如した状態」〔センによる貧困の定義〕と述べるのであれば、人の福祉とその欠如状態としての貧困を把握するやり方を次のようにのべることができる。すなわち、当事者の福祉を構成するどのような基礎的要素を計測すべきかを問う代わりに、その人の〔少なくとも基礎的〕潜在能力を計測すべき、と応え得る。また、貧困を貧困でない状態からどのように区分して同定するかを問う代わりに、その人の〔少なくとも基礎的〕潜在能力が充足しているかどうかを観察するとともに、その人に問うべき、と応え得る。さらに、計測された各個人の要素をどのように集計して貧困指標として表示すべきかを問う代わりに、当該集団のそれぞれの人の〔少なくとも基礎的〕潜在能力が、みずからが価値あると思いう理由のある生き方を追求できる程度に充足しているかどうか、を確認すべき、と応え得る。

潜在能力アプローチの枠組みにしたがえば、人の生き方、すなわち、みずからが価値あると思いう理由のある生き方、の追求を可能にする機能ベクトルが欠けているか、何がどのように欠けているかを評価することができる。そのうえ、当該集団がどのように公正を欠いたものになっているかを分析することができる。この点で、従来の貧困計測のやり方は貧困を根本的に除去または緩和することに資する貧困計測を必ずしもなし得ていない、といえる。貧困を除去し、または緩和することに資する立場から貧困を認識し、計測するには、なによりもそれぞれの人の〔少なくとも基礎的〕潜在能力が充足しているか、が計測されなければならない。

注

- 1 Campbell, N. R. (1928), *An Account of the Principles of Measurement and Calculation*, London: Longmans, Green and Co.。岡村総吾, 寺尾満 (1969), 『測定論 (岩波講座/基礎工学 11)』、岩波書店も参照。
- 2 Ceriori, A. and S. Zani (1990), Chiappero Martinetti, E. (1994)。
- 3 たとえば, Comim (2001, pp.4-8), Brandolini and D'Alessio (2001, pp.4-15), Ruggeri Laderchi et al. (2003, pp.253-257), Qizilbash (2003, pp.3-8) は多くの論点を指摘。
- 4 たとえば, Alkire (2002a, Ch. 2; 2002b, pp.186-192)。また Brandolini and D'Alesso (2001, p.8) の footnote 5、6 および Appendix A も参照。
- 5 〈貧困線〉の論点に関しては、たとえば、United Nations (1954), *Report on International Definition and Measurement of Standard of Levels of Living*, Doc.E. CN5/299, Ravallion (1998) を参照。
- 6 たとえば, Sen (1981, ch.2), Lipton and Ravallion (1995, pp.2582-2583)。
- 7 Geodhart, Th, V. Halberstadt, A. Kapteya and B. M. S. van Praag (1977), The Poverty Line: Concept and Measurement, *Journal of Human Resources*, vol.12, 503-520。
- 8 たとえば, Ceriori and Zani (1990), Cheli and Lemmi (1995), Chiappero Martinetti (1994, 1996, 2000), Brandolini and D'Alesso (2001), Fusco (2003)。

参考文献

- Alkire, S. (2002a), *Valuing Freedoms: Sen's Capability Approach and Poverty Reduction*, Oxford: Oxford University Press.
- Alkire, S. (2002b), Dimensions of Human Development, *World Development*, 30 (2), pp.181-205.
- Balestrino, A. (1994), Poverty and Functionings: Issues in Measurement and Public Action, *Giornale degli Economisti e Annali Economica*, 53 (7-9), pp.389-406.
- Brandolini, A. (2009), On Applying Synthetic Indices of Multidimensional well-being: health and income inequalities in France, Germany, Italy, and United Kingdom, in R. Gotoh and P. Dumouchel (eds.), *Against Injustice*, Cambridge: Cambridge University Press, Chapter 10. [邦訳: 後藤玲子監訳, 『正義への挑戦: セン経済学の新天地』、晃洋書房、2011]。
- Brandolini, A. and G. D'Alesso (2001), Measuring Well-being in the Functioning Space, presented at the First Conference on the Capability Approach.
- Cerioni, A. and S. Zani (1990), A Fuzzy Approach to the Measurement of Poverty, in Dagum, C. and M. Zenga (eds.), *Income and Wealth Distribution, Inequality and Poverty*, Heiderberg: Springer-Verlag, pp.272-284.
- Cheli, B. and A. Lemmi (1995), A "Totally" Fuzzy and Relative Approach to the Multi-dimensional Analysis of Poverty, *Economic Note by Monte dei Paschi di Siena*, 24 (1), pp.115-134.
- Chiappero Martinetti, E. (1994), A New Approach to Evaluation of Well-being and Poverty by Fuzzy Set Theory, *Giornale degli Economisti e Annali di Economia*, 53 (7-9), pp.367-388.
- Chiappero Martinetti, E. (1996), Standard of Living Evaluation Based on Sen's Approach: Some Methodological Suggestions, *Notizie di Politeia*, 12 (43 / 44), pp.37-53.
- Chiappero Martinetti, E. (2000), A Multidimensional Assessment of Well-being Based on Sen's Functioning Approach, *Rivista Internazionale di Scienze Sociali*, 108 (2), pp.207-239.
- Comim, F. (2001), Operationalizing Sen's Capability Approach, presented at the First Conference on the Capability Approach.
- Dutta, I., P. K. Pattanaik and Y. Xu (2003), On Measuring Deprivation and the Standard of Living in a Multidimensional Framework on the Basis of Aggregate Data, *Economica*, 70, pp.197-221.
- Erikson, R. (1993), Description of Inequality: The Swedish Approach to Welfare Research, in M. C. Nussbaum and A. K. Sen (eds.), *The Quality of life*, Oxford: Clarendon Press, pp.67-83.
- Fusco, A. (2003), On the Definition and Measurement of Poverty: the Contribution of Multidimensional Analysis, presented at the Third Conference on the Capability Approach.
- Lipton, M. and M. Ravallion (1995), Poverty and Policy, in J. Behrman and T. N. Srinivasan (eds.), *Handbook of Development Economics, Volume III*, Amsterdam: North-Holland.
- Narayan, D. et al. (eds.) (2000), *Voice of the Poor: Crying Out for Change*, Oxford: Oxford University Press.
- Qizilbash, M. (2003), On the Arbitrariness and Robustness of Multi-Dimensional Poverty Rankings, presented at the Third Conference on the Capability Approach.
- Ravallion, M. (1998), *Poverty Lines in Theory and Practice*, LSMS Working Paper no.133, Washington: World Bank.
- Ruggeri Laderchi, C., R. Saith and F. Stewart (2003), Does It Matter that We Do not Agree on the Definition of Poverty? A Comparison of Four Approaches, *Oxford Development Studies*, 31 (3), pp.243-274.
- Sen, A. K. (1981), *Poverty and Famine: An Essay on Entitlement and Depression*, Oxford: Oxford University Press [邦訳: 黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢饉』、岩波書店、2000]。
- Sen, A. K. (1985a), *Commodities and Capabilities*, Amsterdam: North Holland [邦訳: 鈴木興太郎訳『福祉の経済学 — 財と潜在能力』、岩波書店、1988]。
- Sen, A. K. (1985b), Well-being, Agency and Freedom: the Dewey Lectures 1984, *Journal of Philosophy*, 82, pp.169-221.
- Sen, A. K. (1987), 'The Standard of Living: Lecture II, Lives and Capabilities', in G.Hawthorn (Ed.) (1987), *The Standard of Living*, Cambridge University Press, Cambridge, pp.20-38.
- Sen, A. K. (1992), *Inequality Reexamined*, Oxford: Clarendon Press [邦訳: 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討 — 潜在能力と自由』、岩波書店、1999]。
- Sen, A. K. (1997a), *On Economic Inequality: Expanded Edition with a Substantial Annex 'On Economic Inequality after a Quarter Century' by James Foster and Amartya Sen*, Oxford: Clarendon Press [邦訳: 鈴木興太郎・須賀晃一訳『不平等の経済学 — ジェームス・フォスター、アマルティア・センによる補論「四半世紀後の『不平等の経済学』を含む拡大版』、東洋経済新報社、2000]。
- Sen, A. K. (1997b), Maximization and the Act of Choice, *Econometrica* 65 (4), pp.745-779.

Sen, A. K. (2004), Capabilities, Lists, and Public Reason: Continuing the Conversation, *Feminist Economics* 10 (3), pp.77-80.

Capability Approach as a Framework of Poverty Measurement: Some Suggestions about Procedures of Poverty Measurement

OKA Keinosuke

Abstract:

For removing poverty fundamentally, it is necessary to establish a framework for poverty measurement feasible for inquiring into some of the causes that make certain people poorer than the others. The main difficulty in answering this requirement, however, is that there is little agreement on the definition of poverty, and therefore on poverty measurement. As for poverty measurement done so far, unfortunately, there have been few arguments focused on the reality that in human society there are many people who find themselves in unacceptable destitution. However, if one accepts Amartya Sen's statement that "poverty is seen as the deprivation of some minimum fulfilment of elementary capabilities" (Sen, 1992, p.9), one can argue that Sen's capability approach may make it possible to measure poverty in a useful way for inquiring into some of the causes that make certain people poorer than the others. Looking at the problem of poverty from the perspective of the capability approach proposed by Sen, this paper, first, describes the possibility of poverty measurement able to inquire into some of the causes that make certain people poorer than others, and, second, rethinks the arbitrary inference of authorities inevitably contained within every stage of poverty measurement.

Keywords: poverty measurement, poverty concept, poverty distinction, poverty aggregation, capability approach

貧困計測の枠組みとしての潜在能力アプローチ ——貧困計測手順をめぐる論点の考察——

岡 敬之助

要旨:

貧困を根本的に取り除くには、ある人びとを他の人びとより困窮にしている原因を問うことができる貧困計測の枠組みを確立することが必要である。これまでの貧困計測についていえば、不幸にして、われわれの社会には受け入れることのできない困窮に苦しめられている多くの人びとが存する現実に焦点をあてた貧困計測に関する合意が存在しない。アマルティア・セン (1992, p.9) の潜在能力アプローチの枠組みにしたがえば、こうした困窮の根本原因を問うのに有用な貧困計測を可能にし得るかもしれない。本稿では、センの潜在能力アプローチの枠組みにしたがった貧困の見方から貧困認識と貧困計測の問題を検討し、貧困計測に際して不可避的に入り込む評価者の恣意的判断をできるだけ取り除き、こうした困窮の根本原因を問うのに有用な貧困計測が可能であることをのべた。

